

水澤雪

## のろまと宿なし

ひとりののろまが泣きながら　のろのろ歩いてやってきた  
宿なしおやじがぽつねんと　櫛の木の下に座ってた  
やあやあのろまよ　どうしたね？　宿なしおやじが声かけた

おいらはいつもおそいのさ　それがおいらは悲しいよ  
おいらが何かわかったときにや　みんなとつくに知っている  
ずんずん先へ行っていて　おいらひとりがバカをみる

あのなあ　人にはそれぞれに　自分の時があるもんさ  
それはふつうの時計では　まるで計れんものなんだ  
進みがはやい人もありや　めっぽうおそい人もある  
だけでもそいつを生きなけりや　生きてることにはならんさ

そいじゃあおいらは最後まで　のろまのまままで終わるのかしら  
おいてけぼりをくらったまんま　ひとりぼっちで歩くのかしら

はやいのだっておそいのだって　ほんとはひとりで行くのだよ  
みんないっしょのつもりになれば　なるほどさびしくないけどね  
自分の時を生きるがいい　そうすりやぜんぶわかるだろう  
ふんだりけったり続いても　のろまのまままでいるのだよ

のろまはふしぎな気持ちになって　なんだかふわふわしてるよう  
心がぽうつと明るくなって　小さなあかりが見えるよう  
のろまはあかりを大事にかかえ　ひとりのろのろ歩いていった  
おやじにお礼を忘れたと　気づくのうんとあとのこと